1961年1月16日　第3種郵便物認可　2007年9月1日　第532号（毎月1回1日発行1部100円）
（加盟団体関係者の講読料については、負担金に含まれている。）

念仏

ZENBUTSU

No. 532
仏暦2550年９月
［2007年］

（ハヌマーン　撮影　白川　淳敬氏）

目次

50周年特集ページ
財団創立五十周年を迎えて　大道晃仙会長　安原晃理事長
財団創立五十周年記念　功労者表彰

論点・視点 ⑨　釈悟震「韓国仏教から見た日本仏教」
加盟団体をゆく第８回　新潟県仏教会
比叡山宗教サミット二十周年　世界平和の祈りの集い開催

財団法人全日本仏教会
JBF
WFB(世界仏教徒連盟)日本センター

50周年
縁
おかげさま。
地域の縁・アジアの縁

ご挨拶

財団法人 全日本仏教会
会長 大道 晃仙

この度、全日本仏教会財団創立50周年を迎え、まず、本会を代表して、50年に至る間、本会の発展にご精進いただいた歴代会長、理事長をはじめとする役職員、並びに加盟諸宗派、都道府県仏教会等の関係各位に心からの深甚なる敬意を申し上げる次第でございます。

本会は、昭和32年8月に財団法人として認可され、仏陀の和の精神を基調とし、時代に即応する活発な全一仏教運動の展開により、仏教文化の宣揚と世界平和の進展に寄与することを目的としております。

その成果は現在に至るまで、わが国仏教界を代表し、他宗教と連携をもって、宗教界の抱える諸問題を披瀝し、それぞれの置かれた立場や状況をふまえながら、政府官公庁への窓口としての役割を果たし、また、世界各国の仏教徒はじめ、他宗教との交流と協力をはかり、世界平和への運動に努めてまいりました。

本日の財団創立50周年記念式典を契機として、仏教会が抱える多岐多様な諸問題に対し、積極的に参画いただけるならば、本会が意図する「共存共生」にも、極めて明るい見通しが拓かれるものと思います。

今後、更に、全日本仏教会発展のために、一層のお力添えをいただきますようお願いを申し上げご挨拶といたします。

合掌

ご挨拶

財団法人 全日本仏教会
理事長 安原 晃

本財団創立50周年にあたり、謹んでご挨拶を申しあげます。

各位におかれましては、平素より本会の事業推進のために、格別のご理解とご協力を賜っておりますこと、心から厚く御礼を申しあげます。

現下、国内外の情勢が大きく変わる中で、宗教がらみの戦争や大規模テロの勃発が相次ぎ、国内では少子高齢化や核家族化の進行によって、人心の荒廃など様々な社会問題や課題が山積しております。

このような時代にあって、本会では、財団創立50周年の節目に当たり、過去・現在を検証し、未来への展望を図るため、時代に即応した仏教界の役割について、このたびの記念事業を通して、その構築を進めております。

その取り組みを通して、本年11月に全日本仏教徒会議神奈川大会、明年には世界仏教徒会議日本大会を開催いたしますが、その円成を期すとともに、広報を基軸とした伝統仏教界の情報発信を強化し、加盟団体共有の課題等の対応をはかり、本会設立の理念である仏陀の和の精神を基調とし、仏教文化の宣揚と世界平和への寄与を目指して、このたびの記念事業を推進してまいります。

何卒、各位の益々のご支援とご協力を切にお願い申しあげ、ご挨拶といたします。

合掌

財団創立50周年記念 功労者表彰

●加盟団体表彰

天台宗
天台真盛宗
金峯山修験本宗
天台寺門宗
聖観音宗
和宗
孝道教団
妙見宗
念法眞教
高野山真言宗
真言宗智山派
真言宗豊山派
真言宗大覚寺派
新義真言宗
真言宗善通寺派
真言宗御室派
真言宗山階派
真言宗泉涌寺派
真言宗醍醐派
真言宗国分寺派
真言宗須磨寺派
真言宗中山寺派
真言三宝宗
信貴山真言宗
真言宗犬鳴派
東寺真言宗
浄土宗
浄土宗西山禅林寺派
浄土宗西山深草派
西山浄土宗
浄土真宗本願寺派
真宗大谷派
真宗高田派
真宗仏光寺派
真宗興正派
真宗木辺派
時宗
融通念佛宗
臨済宗妙心寺派
臨済宗南禅寺派
臨済宗円覚寺派
臨済宗建長寺派
臨済宗相国寺派
臨済宗東福寺派
曹洞宗
黄檗宗
日蓮宗
法華宗本門流
法華宗陣門流
法華宗真門流
顯本法華宗
本門佛立宗
本門法華宗
法相宗
聖徳宗
華厳宗
真言律宗
律宗
北海道仏教会連盟
青森県仏教会
岩手県仏教会
福島県仏教会
群馬県仏教連合会
栃木県仏教会
茨城県仏教会
(財)埼玉県佛教会
千葉県仏教会
東京都仏教連合会
神奈川県仏教会
新潟県仏教会
石川県仏教会
福井県仏教会
山梨県仏教会
長野県仏教会
岐阜県仏教会
静岡県仏教会
愛知県仏教会
滋賀県仏教会
京都仏教会
京都府仏教連合会
大阪府仏教会
兵庫県仏教会
和歌山県仏教会
島根県仏教会
岡山県仏教会
鳥取県仏教連合会
香川県仏教会
(社)徳島県仏教会
愛媛県仏教会
高知県仏教会
福岡県仏教連合会
長崎県仏教連合会
宮崎県仏教連合会
沖縄県仏教会
(社)全日本仏教婦人連盟
(財)仏教伝道協会
(財)日本仏教鑽仰会
(社)日本仏教保育協会
(財)国際仏教興隆協会
東京ブディストクラブ
全日本仏教青年会
仏教情報センター

●加盟団体推薦表彰

稲盛和夫（臨済宗妙心寺派）
神奈川県仏教青年会（神奈川県仏教会）
川島宏之（高野山真言宗）
桑原持（岐阜県仏教会）
里見達人（浄土宗）
澤田榮治（岐阜県仏教会）
四天王寺国際仏教大学（和宗）
杉谷義純（天台宗）
大本山永平寺（曹洞宗）
大本山總持寺（曹洞宗）
瀧藤尊教（和宗）
虎山義秀（岐阜県仏教会）
中村康隆（浄土宗）
長谷川正浩（日蓮宗）
松原泰道（臨済宗妙心寺派）
社団法人南太平洋友好協会（臨済宗妙心寺派）
森田禅朗（和宗）
森和久（曹洞宗）

＊50音順・敬称略
＊（ ）内は推薦団体

●財団創立50周年記念事業実行委員会 総務部会推薦表彰

石上智康
上坂悟
川井匡俊
坂詰秀一
瀬古眞隆
塚本啓祥
奈良康明
仏教NGOネットワーク
不破仁
北條成之
松濤弘道

＊50音順・敬称略

論点・視点 ⑨

韓国仏教から見た日本仏教

東方学院講師・文学博士 釈 悟震

今日の日本と韓国は、北東アジアにおいて政治的、経済的または文化的に大きな意味合いを有する国として、両国民が今まで経験し得なかった様々な境遇に遭遇している。

さて、このような今日的な社会変遷を直視した時に、両国においての仏教界はどうか、と申しますと「近からず遠からず」の距離感だけが、ただ時代の潮流に身を任せて傍観しているような感じすらもある。

そこで今日の韓国の仏教徒たちが、日本の仏教界の諸相をどのような観点から理解しているのかを確認することは、今後両国にとって、いや日本仏教界にとって大きな意味があるのではないかと思うところである。

以上の観点から筆者は、自らの見解を踏まえつつ、現地つまり韓国の仏教徒たちの今の声をも拾いつつ一層の客観性を基に「韓国仏教から見た日本仏教」を試みることとした。

先ず、韓国仏教の立場から日本仏教を見た時に最も特徴的に考えられるのは「戒律」の問題であろう。先ずこの問題を検証するにあたって今日の韓国仏教の現状を理解しなければならない。たとえば韓国仏教の主流といわれる曹溪宗に関して少し触れるのはよい例になると思う。

曹溪宗の正式な名称は「大韓仏教曹溪宗」という。同宗は三千余りの寺院と一万三千人余りの僧侶を有する韓国仏教全宗派、約五十の宗派の中でも韓国仏教を代表する比丘・比丘尼教団として多くの信者から崇められている教団である。

同宗派に所属している僧侶に関して同宗派全般の規範を示す『宗団法令集』によると「僧侶は具足戒と菩薩戒を授持し、修行と教化に全力を注ぐ出家独身者でなければならない」と定められている。したがって同宗所属の僧侶は全て具足戒を授け、それを守り、なお出家した後には生涯独身でなければならない。

彼らは全く自由な生活様式においての修行形態であっても基本的には、「比丘・比丘尼は、社会の精神的指導者であると同時に奉仕者であり、聖職者として高邁な人格と資質と能力を備え、平素において言動が一般民衆の師表となり、ブッダの救世願力の実践者として修道と伝法を通して仏国土建設の使命を果たすべきである」という法令の定義によって曹溪宗の僧侶は、男僧が二百五十戒、尼僧は三百四十八戒を受け、生涯持戒し、修行に邁進するのが基本となっている。

このような環境にある韓国の仏教徒たちは、当然ながら僧侶たる者のあるべき姿が自ずと造形されている。したがって日本仏教の歴史的経緯などを知り得ない韓国の仏教徒たちは今日の日本仏教の戒律観や僧職たちのありのままの現状には多くの疑念を抱くのは当然かも知れない。その実、筆者の調査の協力者の一人である韓国仏教の最大新聞である『仏教新聞』の編集局次長職にある李成洙氏は「曹溪宗の僧侶たちは生涯独身を貫いている。しかし日本の僧侶たちは大半の方が結婚をし、家族と共に生活をしている姿には多くの違和感を抱く。しかしながら、このような日本仏教の現状をありのままに認めていかないことには、日韓両国の仏教徒たちの間において真の理解や「仏教」という同じ価値観による共生は得られないであろう」と、述べていることからも韓国仏教徒にとっての僧侶たちの「持戒」は非常なる意味を持っているに違いない。しかし、一方においては日本仏教の現状を否定的に見るだけではなく、あくまでも現状をありのままに認めようとする姿勢は、やはり韓国の仏教徒たちは、日本は「仏教国」である、という観点から隣国の仏教徒たちと価値観を共有したいという願いが暗示しているように思われる。

今一つ韓国仏教から見た日本仏教の特徴としては「檀家制度」である。つまり韓国仏教には所謂日本の檀家制度のようなものはない。各寺院ことにそれぞれの「信者制度」はある。しかし日本の檀家制度とは違って各寺院の信者たちは他の寺に自由に移動が可能であり、どこの寺院でも受け入れが全く自由である。と申しましても日本仏教が自由ではない、という意味では決してなく、日本仏教においての「檀家寺」とは、すなわちお墓の管理保全や祖先崇拝の受け手として直結するのが、ほとんどの日本人の長い間の習慣または生活様式の中に根ざしている文化として位置づけられる故を意味するものである。一方、韓国の寺院の中にはお墓もなければ納骨堂もない。結局、寺院の運営は在家信者たちの寄進によって行われている。信者たちは布施する対象の寺院を自由に選ぶだけに、僧侶たちは日頃の厳格な自己修練や持戒による清浄さと教化力が求められている。もし信者たちの期待に添えない場合の寺院は信者がいなくなり、経営ができなくなり、やがては破断の道を辿ることになるであろう。

日本の檀家制度の生活様式を持ち得ない韓国の仏教徒たちにとっては、仏教寺院にお墓があり、信仰の最も神聖な場所である御本堂や御法堂に棺桶を安置し、葬儀を行ったりするのは、もっての外であると受け止めている。したがって日本仏教が所謂「葬式仏教」といわれるのには仏教本来の道筋から外れているのではないか、という違和感をもっているのが現状といえよう。

たとえば上記の李氏は「韓国の仏教寺院は街や村の中には、それほど見かけることができないのであるが、日本の仏教寺院はほとんどの寺院が街や村の真ん中にある。殊に死者儀礼の中心地が寺であることには非常なる違和感と同時に神聖なる寺院として受け止め難いものがある。」といわれていることからも分かり得よう。

しかし同時に同氏は「大部分の日本人は、死後、仏教寺院に安置され、その家族たちが、御先祖様を見守りながら、一般民衆の生活文化として深く根ざしているのは、いわゆる神々しい出家主義や戒律至上主義などを標榜する他の仏教とは異なる日本仏教独特な親近感があり、韓国仏教では見ることのできない柔軟さに感心している」という意見も述べている。

また彼はいう。「今日の日本仏教を見て、違和感を抱いている点もあるが、韓国仏教から見て、長い歴史の中で、各宗派や仏教寺院が、それぞれの伝統を絶えることなく、保持しつづけられ、なおかつ未来へと伝承させる体勢を保持している。つまり韓国仏教は、日本仏教が経験し得なかった戦乱や様々な歴史的経緯によって伝統ある仏教文化の伝承が難しかった環境の観点から考えると仏教徒の一人として大変喜ばしいことであった。また韓国仏教では、約五十を数える宗派があっても、仏教教育機関としての大学が、古い歴史を有する曹溪宗門の東国大学や僧伽大学を始め近年創立された天台宗の金剛大学、真言宗の威徳大学などがあるだけである。しかし日本は、各宗門ことに古い歴史を有する大学が存立している。大変うらやましい限りである。」とも述べている。

もちろん同氏の意見が決して韓国の仏教徒たち全てを代表するものではないが、筆者の設問や講演先の聴衆たちの質疑応答にも大半の人々から同様な御意見を頂戴したので、総じてそのような見解を抱いているのではないかと思われる。

また日本特有の仏教文化の一つとして「高額戒名料」に関する事案は韓国仏教徒としては理解し難いであろう。この件に関しては、昨今日本社会においても様々な議論が生じていることを理解している。しかし筆者が知る得る限り、この問題は決して一概に軽々に判断し、一刀両断にて正邪の定義をつけることができる問題ではないと思う。それは何故か。長い間、少なくとも明治以来、日本の近現代においての日本仏教が辿って来た歴史的文化的経緯や各仏教寺院の一概に片付けられない生活文化が絡む現実的な問題点が潜在しているからであると思われる故である。

このような日本仏教特有な歴史的文化的かつ現実的環境の知識がない異文化の仏教徒にとっては確かに理解し難い案件であろう。つまり、韓国でも「戒名」制度がある。しかし、日本のように亡くなった人に与えるものではなく、在家が仏教徒になった証として与えるものである。たとえば韓国では年一回全国の金剛戒壇が設けられている寺院、つまり戒の授受を行うことが出来る本山格の寺院において菩薩戒の授戒式が行われる。その際、各仏教信者は五戒や四十八戒を授ける。いわゆる在家戒と大乗戒を授ける折に「戒名」を受戒者に与えると同時に、真の仏教徒であることを宣言する。その際にいわゆる「戒名料」という名目の代金は全く存在しない。つまり菩薩戒の授戒式への参加費にすべてが含まれている。その金額は全く高額ではなく、一般の民衆レベルで支払える金額である。

そこで授かった戒名の使い方であるが、日本では死者のお位牌に記し、お弔いのために用いるのが主たる意味として理解されているのが一般的であろう。しかし韓国では戒名は生前に仏教徒たる証として一般的に呼称されている。つまり戒名を毎日一般的に使うことによって、自らが仏教徒である自覚と同時に「諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教」の真の意味の実践を怠ることなく、毎日の生活環境を戒めている大きな役割を果たすのが、「戒名」の意味内容であるとも韓国の仏教徒たちは心得ているのが実情である。

このような意味内容を有する韓国の仏教徒としては、現況の日本仏教における戒名に関する諸相は、たとえ日本仏教の歴史的かつ文化的事情の知識を知り得たとしても普遍思想として昇華される事案として多分理解し難いだろうと思う。

その他に「日本仏教と社会の問題」、「システマティックの日本仏教」に対する韓国仏教徒の異なる所見を検証すべきではあるが、ここでは紙面の関係上、留意点のみを申しあげて終わりにしたい。

釈 悟震（しゃくごしん）略歴
一九四七年生まれ、曹溪宗にて出家
比丘僧文学博士。現在財団法人東方研究会研究員・東方学院講師、日本印度学仏教学会評議員。主な著訳書として『パーナドゥラー大論争』（雲舟社）、『仏陀のいいたかったこと』（経書院、韓国）他多数

＊次回の「論点・視点」（十月号）は、武蔵野大学教授　ケネス田中氏にご寄稿いただきます。

加盟団体をゆく

《第八回》新潟県仏教会

「加盟団体をゆく」今回は新潟県仏教会を訪ねて、中村啓識会長、春日浩三本会評議員、上原教仁副会長、小林秀徳事務局長、布川宥明事務局員、金子重紀事務局員にお話を伺いました。

新潟県仏教会の皆様

―仏教会の活動で、継続的に、また特に力を入れていらっしゃる点についてお話下さい。

新潟県仏教会は、六十二年前の終戦当時に発足しました。昭和二十七年のＷＦＢ会議、二十八年の第一回全日本仏教徒会議高野山大会等歴史的な意義のある大会に参加させて頂きましたが、終戦後の混乱の影響もあり、当時はなかなか組織としての活動は難しかったと聞いております。昭和四十三年位から、ようやく組織がまとまってまいりまして、四十五年には第十八回の全日本仏教徒会議新潟大会が長岡にて開催されました。非常に盛会で、消防局から「（会館に人が集まりすぎて）床が抜ける恐れがあるのではないか」との通告を頂き、驚いた記憶がございます。

その十八回大会の後に、長岡市仏教会では檀信徒会を作りまして、この会が我々仏教徒の活動に大変大きな力を今日まで与えてくれました。近年、檀信徒会の高齢化の問題、世代交代が難しい点が課題となっておりますが、県仏教会としてもできる限りの協力を行い、問題解決に尽力しております。

第十八回大会を行ったメンバーが中心となり、平成十三年の第三十八回全日本仏教徒会議新潟大会を開催、十八回大会を超える規模の人々にお越し頂き、大変盛会でありました。これも全仏及び県仏教会の方々、何より地域の皆様のご尽力のおかげだと思っています。

新潟県は、海岸線と地域の広さの関係から、県内各所の寺院が集まるのは距離的には非常に難しく、市町村合併の影響も非常に大きいですが、何とか遠方の寺院との繋がりも確保するよう対策を考えております。

そうした状況の中で、花まつりの行事は今年八十二回を数え、大きなイベントとして市民の皆様にも喜んで頂いており、県内仏教会の交流という側面でも大変意義のある行事になっております。また、この花まつりは仏教系新興宗教団体とも共催で行っております。そうした試みは全国的にも珍しいのではないでしょうか。共催に関しては内外でも様々な議論がございました。ですが、釈尊の教えは同じであり、同じく釈尊の誕生を奉讃したい、という強い願いのもと、現在の形が実現いたしました。今後も継続するよう尽力してまいります。

新潟県は、近年二度に渡る震災に見舞われました。その際、全日本仏教会の救援基金をはじめとして、沢山の支援を頂きました。この支援金を、当初寺院数に応じて配分する、という案もあったのですが、長岡市仏教会では、何より檀家の皆様、市民の皆様が精神的にまいってしまっていて、この支援金で何か元気づける事、精神的に癒しをもたらす事はできないだろうかと考えました。役員会の総会でもご了承頂き、「やすらぎ法話会」を開催致しました。

中でも、薬師寺の安田暎胤管長とご縁があり、御法話のお願いに伺いましたら御快諾頂きました。その際に、中国琵琶の第一人者を知っているので、中国琵琶の演奏も取り入れてはどうか、という提案を頂きまして、「法話と音楽」という形で開催、非常に好評でした。今年、第三回を十月十三日に

開催致します。今回は日本・インド文化交流五十周年に際し、大使館よりインド舞踊のスタッフを派遣して頂きまして、法話とインド舞踊が楽しめる行事となっております。地震が続くと、ちょっとした余震でも大きな不安にみまわれ、精神的に不安定になってしまうのを我々も今まさに経験しております。そうした市民の皆様への精神的な支援を、こうした行事を通じて行ってまいります。

―昨今の様々な社会問題について、感じていらっしゃる思いをお聞かせ下さい。

今、世界では宗教紛争が起こってしまっておりますが、これだけ宗教が多様な日本において、なぜ宗教紛争が起こらないのか、という点は研究すべき価値があると思います。脳死の問題、死刑の問題等社会的・倫理的な問題をとことん突き詰めて研究してゆき、他者を殺さずに自身の煩悩を殺すという仏教独特の発想のもと、宗派・宗教を超えた部分での融合を進めてゆくべき、と考えております。

また、悲惨な事件、心の問題、家庭の問題に命の問題等、様々な国内の問題への対策についてですが、人間一人一人の力というのは限られていると感じます。これは、新潟を襲った震災の際も実感しました。一人では何をどうすることもできないのです。

どの問題に関しても、対話の場をいかにして作るか、という事が最も重要だと思います。親子でも、学校でも、直接の対話が難しいなら、有縁の方、もしくは第三者機関等に支援をして頂く。もし対話が実現しなくても、まわりからの支援というのは広報、広く知らせる事が出来るわけで、最悪の事態を迎えてしまう可能性が少なくなります。様々な悲惨な事件には、概ね孤独と無関心が背景にあります。

「慈悲の反対は無関心」という言葉もあるように、和合僧の精神の下積極的に我々も対話の場に加わってゆく事が今後ますます重要になると考えています。

―現在の仏教界と今後の仏教界の在り方について、指針のようなものをお聞かせ下さい。

現在の仏教界は死者儀礼と宗派仏教への比重が高くなりすぎてしまっており、この二つの偏りをどう是正するかが重要であると考えます。国内には多数の仏教徒がおりますが、その大多数は市民であり、お寺だけの仏教になってしまってはダメだと考えます。一般の方にとっては、我々僧侶が袈裟を身にまとっただけでも敷居が高くなってしまいがちで、市民の仏教、地域の仏教をどう実感して頂けるかを念頭に置いた活動をしてゆくべきです。

新興宗教系団体の方々のお話しをお聞きしたり、一緒に行事に参加させて頂いて感じることですが、団体内部にいつでも緊張した関係があります。そのため、既存仏教団体にはない意欲や熱意があり、学ぶべき点も多いと感じます。我々も若い世代、それもできるだけ在家の人を抜擢してゆき、「学ぶ姿勢」を取り入れて行くことが重要ではないでしょうか。

―本年財団創立五十周年を迎える本会の活動へのご意見・ご要望がございましたらお聞かせ下さい。

是非取り上げて頂きたい地域仏教会が抱える問題として、過疎化の問題が挙げられます。住職がいなくなってしまって無住になり、潰れてしまう寺院が非常に多いです。兼務するにも限度があり、お檀家さんが困ってしまうのが現状です。ですが、宗派単位ではなかなかこういった問題へ対応して頂けないので、全仏で是非考えて頂きたいです。

また、セミナー等の開催は非常に参考になり、励みになるのですが、東京開催では参加が難しいです。講師を派遣しての、地方研修会の開催を行って頂きたいです。

財団創立五十周年を迎え、ロゴマークやテーマ、仏教徒の歌に関しても、五十一年目以降も継続してゆく、という事が難しいですが、大切な事だと思います。そのために、県仏教会は地域のまとめ役になり、より良い協力関係を今後も構築できるようにしてゆきたいと考えています。

比叡山宗教サミット二十周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い開催される

八月四日(土)比叡山宗教サミット二十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が滋賀県大津市の比叡山延暦寺に於いて開催された。(一九八七年に第一回目が比叡山延暦寺にて開催)

当日は十九ヶ国より仏教、キリスト教、イスラーム、ヒンドゥー教などの宗教者をはじめ二千人を超える人々が参加した。

半田孝淳天台座主（一番右）
安原晃理事長（右から5人目）

八月三日
開会式典

八月三日は京都国際会館において、開会式典に先立ち、ボスニアと広島の子ども達が理想の未来を描いた絵とメッセージが披露され、民族・宗教間の争いのない、平和な未来への切望が訴えられた。開会式典においては仏教代表として本会安原晃理事長、半田孝淳天台座主が登壇した。

その後、各国代表者の挨拶が行われ、濱中光礼天台宗宗務総長は「人類は限りない欲望の結果、地球環境や生態系を破壊している」と述べ、環境問題への対応が宗教界全体における急務であると訴えた。また、WFB（世界仏教徒連盟）事務総長のパロップ・ダイアリー氏が同会長のパン・ワナメティ氏のメッセージを代読し、諸宗教の対話の重要性を訴えた。

記念講演・シンポジウム

記念講演及びシンポジウム「和解と協力～宗教・民族・国境を越えて～」と題して各国のパネリストが出席、宗教間対話の重要性と、対話に至るまでの困難をいかに解決してゆくか、戦争を起こす際に宗教が利用されない為にはどのように考えて行動してゆくべきか等に関して意見交換が行われた。

緊急声明

シンポジウムの後、アフガニスタンで発生したタリバンの韓国人拉致及び殺害事件に関して、即時解放を求める緊急声明が採択された。人質の拘留及び殺害は、憎しみの連鎖と更なる混乱を招くだけであり、人質の即時解放および対話への道を開くことこそが、『和解と許し』をもたらすと主張、人質の早期解放を訴えた。

歓迎レセプション

閉会後、歓迎レセプションがグランドプリンスホテル京都にて催され、約600名が参加。ボスニアの子どもたちの絵が主催者へ贈呈された後、安原晃理事長が乾杯の挨拶を行った。各国の参加者が終始和やかに歓談していた。

乾杯の発声をする安原理事長

八月四日
特別フォーラム

明けて四日は、京都国際会館に於いて特別フォーラムが行われ、「自然との和解と共生―宗教者は地球環境保全のために何ができるか―」及び「諸宗教の対話と協力―紛争和解から平和構築のために―」の二つのフォーラムが同時開催され、仏教代表として韓国宗団協議会副会長の朱正山師、SVA専務理事の秦辰也師、法相宗薬師寺管主の安田暎胤師などがパネリストとして参加。フォーラムでは、祈りは非常に実践的な行動で

ある、という側面から祈りをとらえ、豊かな精神を信じて他の人間を許す、という事には訓練が必要であること、他宗教から非難を受けても「慈悲心」を忘れない事等を実践し、祈りと行動を一致させるための意見交換が行われた。また、様々な宗教をきっかけ、もしくは理由として戦争が起こる背景には、その戦争により利益を得る人間がいるという可能性を考慮すること、日本の憲法第九条は、世界平和が実現できるかどうかのモデルケースとも言え、第九条を変える事は世界に悪いサインを送ることになるのではないか、等の意見が交換され、各代表の立場からコメントが出されていた。

世界平和祈りの式典

フォーラムの後、参加者は比叡山延暦寺根本中堂前へ移動し、世界平和の祈りの式典が開催された。

宮本けいし代表会議運営委員長の開会挨拶に続いて、比叡山での二十年の祈りに対して「ワールドピースベルアソシエーション」（吉田富治郎）会長が米国ニューヨークの国連本部にある鐘と同様の「平和の鐘」を贈呈、吉田会長が延暦寺清原恵光執行に目録を贈り、境内の文殊楼手前に設置された鐘の除幕式が行われた。

三時半、ボスニアと広島からの各四名の少女と天台青少年によって一緒に鐘が打ち鳴らされ、参列者が平和の為の黙祷を捧げた。

黙祷を捧げる各宗教代表者

主催者を代表して、会議名誉議長の半田孝淳天台座主は、「平和が達成されない原因は相互不信と富の偏在にあり、これを解決するには対話による相互理解が必要である。世界には対立と憎悪、暴力と破壊の連鎖がやまず、大量破壊兵器の脅威は増大し、地球温暖化は生態系を破壊しようとしている。

私たち宗教者はこの集いを通じて、和解と許しこそが負の連鎖を絶つ選択であり、この決断を出発点として協力していきたい」との主旨の挨拶を行った。

半田孝淳天台座主の挨拶

続いて各宗教代表による、各宗教形式での祈りが捧げられ、仏教、キリスト教、ヒンドゥー教、イスラーム、新日本宗教団体連合、教派神道連合会、神道、ゾロアスター教、諸宗教組織が祈りを捧げた。ユダヤ教は安息日の為車での移動が出来なかったが、別の場所より祈りを捧げた。

「平和な地球」オブジェの創造

参加者には青や白の折り紙が手渡され、折られた数千羽の折り鶴を透明な球体にボスニアと広島の子ども達が入れていった。白は陸地、青は海を表しており、平和な地球のオブジェを創造した。同オブジェは八月六日広島にて開催された平和記念式典の際、原爆供養塔の前に安置された。

比叡山メッセージ２００７の発信

二十周年の節目を迎えるにあたり、比叡山メッセージ２００７が発信された。

「殺戮と憎悪の連鎖に、宗教の違いが紛争の激化を煽ったという過去の背景を反省し、平和の祈りを開催してきた。ところが今日の状況を見ると、未だ努力が足らざることを認めざるを得ない。われわれは決意を新たにして、更に「和解と許し」によってこそ、初めて平和がもたらされることを訴えつづけるものである」という主旨のメッセージが高々と読み上げられた。

式典終了後、大津プリンスホテルにてさよならレセプションが開催され、参加者は歓談しながら、今後の平和実現への協力を誓い合っていた。

新潟県中越沖地震発生に伴い、新潟県仏教会を訪問

今号掲載の「加盟団体をゆく」新潟県仏教会取材予定日の一週間前に、新潟県中越沖地震が発生した。取材は困難かと思われたが、「こういう震災があったからこそ、是非現状を取材して頂きたい」という中村啓識新潟県仏教会会長の力強いお言葉を頂き、震災状況の取材も行うこととなった。

七月二十四日、現地に到着。市内の一部でJR線不通の為、代換バスが運行していた。

新潟県仏教会の皆様からの話では、「前回の地震の時とは揺れ方が違うようには感じたが、非常に大きな揺れだった。震度は前回よりは大きかった。建物がゆがんでしまい、扉が閉まらなくなったり開かなくなってしまった箇所がある。壁が崩れたり亀裂が走ったりしてしまった箇所も多く見受けられるが、崩れた部分の多くは前回の地震で崩れて補修した箇所が再度崩れた、というケースが多かった。柏崎市周辺は、もっと甚大な被害を被っている。私達も被災者であるが、何か出来ないかと話し合っている最中です」とのお話しを頂いた。

二度に渡る大きな地震が家屋に与えたダメージが予想以上に深刻であることをあらためて思い知らされた。

また、中村会長は震災の影響について、「二度に渡って大きな地震を経験して、地震に対する恐怖を強く感じている方が非常に多いです。檀家さんでも、ちょっとした余震でも家が崩れそうで怖いので、すぐに家を飛び出す、という話を聞きます。今日も早朝に地震がありました。精神的な影響が一番心配であり、何か勇気づけたり元気づけたりすることを、私達がやっていかなくてはと強く感じています」とのお話しを頂きました。

本会からは「救援基金」よりお見舞金三十万円を新潟県仏教会に寄託し、今後も積極的な支援活動を展開してまいります。

中村会長（右）へお見舞金が手渡される

「救援基金」ご協力のお願い

本会では、国内外における災害救援や人道的支援に対し、緊急且つ迅速な対応をすべく「救援基金」を常時開設しております。今回の地震災害に対しては、救援機関並びに仏教系NGO団体等を通して、現地の被災者救援活動を支援いたします。

つきましては、加盟団体・各御寺院・仏教徒の皆様、そして、宗派・宗教を超えて、皆様の暖かい浄財を下記口座までお寄せ頂きますようお願いいたします。

なお、新潟県中越沖地震への特定したご協力の場合は、その旨通信欄へお書き添え下さい。

記

郵便振替口座　口座番号
００１１０―９―７０４８３４
口座名義　全日本仏教会　救援基金
お問い合わせ先
財団法人　全日本仏教会
電話　０３―３４３７―９２７５

【寄付者】白井雄仁・芝仏教会・慈願寺・財団法人埼玉県佛教会・香川県仏教会・財団法人全日本仏教婦人連盟・浄土宗西山禅林寺派・時宗・香川県仏教会・真言宗泉涌寺派・愛媛県仏教会・臨済宗円覚寺派・日曜説教会・唐招提寺・仁和寺

（4月1日～7月31日）
（順不同・敬称略）

ご支援ご協力ありがとうございます。

残暑お見舞い申し上げます

時宗宗務所
宗務長　髙木貞歡
神奈川県藤沢市西富一―八―一　遊行寺内
〒251―0001　〇四六六（二二）七二七六

兵庫県佛教会
会長　濱田諭稔
副会長　足立有教
同　森日洸
同　池谷正信
兵庫県神戸市兵庫区松本通二―四―一一　願成寺内
〒652―0045　〇七八（五一一）二七八八
FAX　〇七八（五二一）三六〇三

事務総局録事

六月（一～三十日）

一日▼局内会議
▼勧募部会
四日▼第二十四回ＷＦＢ世界仏教徒会議日本大会部会
五日▼第四十回全日本仏教徒会議神奈川大会部会
▼自民党本部懇談会出席
六日▼民主党パーティ出席
▼ＩＭＡＤＡ・ＪＣ第十八回総会出席
七日▼京都仏教会取材
八日▼東京都仏教連合会理事会出席
▼ＢＮＮ総会出席
十一日▼事務連絡会議
十二日▼河和田唯賢師取材
十三日▼香川県仏教会研修会
▼仏教英語プログラム開催（於　大正大学）
▼電通来局
▼浅草観光連盟訪問
十五日▼国民新党パーティ出席
▼局内会議
▼無料法律相談室
十八日▼インド大使館来訪
▼神奈川県仏教会　全日本仏教徒会議実行委員会出席（於西有寺）
十九日▼鈴木政二内閣官房副長官と懇談
二十日▼宗教法人審議会出席
▼日韓・韓日文化交流大会打合せ（於　光明寺）
二十一日▼社会人権審議会（社会部会）
▼パキスタン大使館訪問
▼台北駐日経済文化代表処来訪
二十二日▼宗教法人税制に関する「朝食勉強会」出席
▼浅草仏具組合訪問
二十三日▼（社）部落解放・人権研究会（歴史・宗教）合同部会
二十五日▼事務連絡会議
二十六日▼日韓・韓日文化交流大会（至　二十九日迄）
二十七日▼教化セミナー開催（於御茶ノ水セントラルビル）
▼仏教英語プログラム（於大正大学）
二十八日▼浄土宗総合研究所シンポジウム（於　三縁ホール）
▼日本宗教連盟幹事会・理事会
二十九日▼鈴木寛参議院議員来局

七月（一～三十一日）

二日▼カザフスタン大使館書記官来訪
▼長崎県仏教連合会発会式出席
三日▼東京お盆まつり出席
四日▼局内会議
五日▼比叡山サミット常任委員会・運営委員会出席
九日▼関西支局運営委員会・局内会議
十一日▼日本宗教連盟幹事会
▼仏教英語プログラム開催
十三日▼盆会休日（至十六日まで）
十七日▼社会人権審議会（人権部会）
十八日▼人権研修会（於　松山市）
十九日▼事務総局連絡会議
二十日▼事務連絡会議
二十三日▼大谷派宗務出張所長来局
二十四日▼滋賀県仏教会取材
▼佐藤国連大使と面談
二十五日▼新潟県仏教会取材
▼仏教英語プログラム
二十六日▼全青協訪問
二十七日▼総務・式典合同部会
▼比叡山サミット会議出席（於　天台宗務庁）
三十日▼第四十回全日本仏教徒会議神奈川大会部会
▼ＢＮＮ企画委員会
三十一日▼記念誌編纂部会
▼大谷派教務所長来局
▼同和研修会講師派遣（於日蓮宗宗務院）

訂正

前号（五三〇号）の十四頁、天台眞盛宗宗務所総本山西教寺の暑中お見舞いの中において、
宗務総長　執事長　武田　圓寵
と掲載すべき所、役職名に誤りがございました。また、
教学部長　三津　堯賢
と掲載すべき所、役職名に誤りがございました。謹んで訂正させて頂きますとともに、不手際により大変ご迷惑をおかけしましたこと、関係各位に心よりお詫び申しあげます。

★今月の表紙について★

ヒンズーの神、ハヌマーンの面をつけておどける少年。ハヌマーンは怪力、勇敢、忠孝の神としてとても人気があり、親しく崇拝されている。また、その神話は中国の孫悟空、日本の桃太郎、山梨県大月市の猿渡伝説に似ていて興味深い。仏教東漸によって伝わったのだろうか。（ベナレスにて）

無料法律相談室

長谷川正浩顧問弁護士による、無料法律相談を毎月第二、第四木曜日の午後開催しております。本会事務総局03(3437)9275へ事前予約の上おいで下さい。

二〇〇七年九月一日発行
九月号 第五三二号
全仏 ZENBUTSU
発行人 池田行信
発行所 財団法人 全日本仏教会 〒一〇五―〇〇一一 東京都港区芝公園四―七―四 電話〇三(三四三七)九二七五 FAX〇三(三四三七)三二六〇 URL:http://www.jbf.ne.jp/

全日本仏教会財団創立50周年記念事業
第40回全日本仏教徒会議神奈川大会プレイベント開催

平成19年11月19日・20日の両日、第40回全日本仏教徒会議神奈川大会がパシフィコ横浜にて開催されます。これを記念して、各種プレイベント行事が企画・開催されます。

【9月8日(土)】 12:00〜20:00 入場 300円(アジアへの義捐金として)
「ゆめ観音」大船観音境内 アジアフェスティバルin大船

観音信仰で結ばれたアジア各国の僧侶をお招きし、それぞれの国の様式で平和の祈りをささげ、音楽や舞踊を催し、ひとときでも楽しい時間を過ごしていただく場を設けようということで企画された「ゆめ観音」は今年で第９回目を迎えます。当日は神奈川県仏教会もブースへの参加を行っております。ブースでは、ダライ・ラマ師の関連商品(ストラップ・本・DVD)、SVAのクラフトエイド商品等の販売を予定しております。催しとして、各国の月琴・舞踊・獅子舞・和太鼓等々の舞台に加え、各国料理の出店も並び、夕暮れ時に平和祈願の幻想的な法要が行われます。午前11時より開催。交通はJR東海道線、大船駅西口より徒歩５分です。

去年も盛況に開催されました

問合せ先　大船観音寺　０４６７―４３―１５６１（ゆめ観音実行委員会）
主催　ゆめ観音実行委員会（大船観音寺・SOTO禅インターナショナル）
後援　鎌倉市・かながわ国際交流財団　協力　第五教区・即心会
ゆめ観音ホームページ　http://www.soto-zen.net/yume/

【9月29日(土)】
平塚市文化財ウォークラリー開催(全日本仏教会後援)

平塚市内の文化財を所有している御寺院の協力のもと、ウォークラリーを開催します。豊田の清雲寺より歩き始めて、入野の福田寺・纏の薬王寺・広川の善福寺を巡り、金目の光明寺が終点となります。この間、青年僧が道中の先導を務め、各寺院ではひらつか文化財ガイドボランティア協会の協力による文化財についての説明があります。最後に、神戸の災害ボランティアが製作した数珠を授与します。参加ご希望の方は、下記までハガキ又は封書にてお申込下さい。参加費無料。

日　時　午前９時より受付開始　午後４時行事終了予定（少雨決行）
集合場所　平塚市豊田本郷　清雲寺境内（駐車場はありません）
申込方法　〒259-1216　平塚市入野12　福田寺へ
　参加者の住所・氏名・電話を記入してハガキまたは封書にて申込み下さい。
申込期日　９月20日消印まで　問い合わせ先　0463-32-8584　福田寺
定　員　先着200名
持　物　天候により、帽子や雨具。また、途中で食べるお弁当、飲み物をお持ち下さい。
主　催　神奈川県仏教会